

気の3次元構造をトモグラフィーで求める試みについて紹介した。国土地理院のデータを使えば日本列島スケールの大気屈折率の3次元構造を、GPS受信機を1km間隔で置いた稠密観測では鉛直に1km程度の分解能で水蒸気の3次元構造が推定できる。瀬古は平原と同様の方法で、梅雨前線上のメソ擾乱の北側に進入してきた乾燥域の立体構造を国土地理院のデータから推定することに成功した。

LEO(低軌道衛星)を用いたGPS電波の掩蔽観測で成層圏の温度の鉛直プロファイルを求めることが出来る。西田は米国UCARが解析したデータを調べ、GPS

掩蔽法のデータは十分な精度があることや、赤道域の圏界面高度の季節変化などについて議論した。

最後に内藤は世界のGPS気象学の現状と将来計画を紹介した。LEOなどを使った宇宙型GPS気象学の計画が世界各国で推進してされており、日本でも本格的に研究すべきであることが強調された。内藤は、衛星観測が従来の放射強度を測る方法からGPSのような位相を測る方法に変わりつつあり、今後非常に高精度の観測が行われるようになるだろうと話を締めくくった。

中村 一 (気象研究所)

==== 編集委員会だより ====

「天気教室」欄の開始にあたって

本誌第45巻11号でお知らせしたように、本号から新しい企画「天気教室」欄を始めます。「天気教室」欄では、「天気予報・気象観測の現場や学校教育などに有用な気象学や気象技術の知識をわかり易く解説する」ことを目的としており、比較的限定されたテーマに関する解説を1回読み切り形式で掲載していきたいと考えています。今後、こんなテーマについてのわかりやすい解説をとというご希望がありましたら、編集委員会まで遠慮無くお寄せ下さい。編集委員会で適切な方に執筆を依頼し、順次掲載していきたいと思えます。原則として、依頼原稿によりますが、日頃から研究・気象業務の現場で活躍されている方々からの有用な解説のご投稿も歓迎いたします。

本欄の新設を検討していた頃、ちょうど本学会と気象業務支援センターとの共催により、気象予報士試験に合格したレベルの方々に、さらに進んだ知識を取得していただくことを目的とした「気象技術講習会」が行われることになり、同講習会の第1回のテーマとして「メソ気象」が選ばれました。編集委員会では、「メソ気象」は天気予報・気象観測の現場でも重要なテ-

マの1つであり、もしその内容に関連した解説を「天気」に掲載できれば、講習会に参加できなかった会員の方々にも有用ではないかと考えました。そこで、気象業務支援センター及び講師の方々のご了解を得て、各講師の方が話されたテーマについて「天気教室」向けの解説をご執筆いただくことをお願いし、本欄の開始に当たって連載することに致しました。今後、小倉義光「メソ気象力学の基礎」、近藤純正「大気境界層の気象」、吉崎正憲「メソ対流系」、二宮洗三「梅雨前線と豪雨」、高橋劭「雷」(敬称略)などの掲載を予定しています。以上のような経緯による掲載のため、本欄で想定するよりも若干難度の高い解説もあり、また充実した内容のために数回にわたって連載するものもありますが、いずれも各分野の第一線で活躍の方々の手になるもので、多くの会員の皆様にとって有用なものになるのではないかと期待しています。今後本欄を発展させるためにも、会員の皆様からのご意見・ご批判をいただければ幸いです。

「天気」編集委員会